

能登半島地震から学ぶこと

今年元日の夕暮れに能登半島地震が発生した。最大震度7、被害に遭った住宅は約12万棟を超える大きな地震となった。過去の地震などの災害と比べて、今回の被害の特徴の一つに、過去の震災と比べて停電や断水の解消や住宅の復旧にかなりの時間を要していることが挙げられる。

要因に、能登半島の地理的な制約がある。能登半島は北陸地方の中央から突き出した形となっており、陸路でのアクセスは限られている。土砂災害や大量のがれきが発生したため、自衛隊や作業車両などの通行が課題となった。

三重県も同じような課題を抱えている。南北に長く、尾鷲市や熊野市など東紀州地域へのアクセスはかなり限られている。もし、南海トラフ地震が発生して紀勢自動車道や国道42号が寸断されると、東紀州地域は能登半島地震と同様に孤立した状態になると考えられる。

想定される事態を防ぐため、中部地方整備局は中部版の「くしの歯作戦」という道路啓開オペレーション計画を策定している。道路啓開とは救援、救護の障害となるがれきなどでふさがれた道を切り開き、緊急車両等の速やかな通行を確保することで、幹線から被災地へ道路が複数、啓開されていく様子が「くし」のように見えることから「くしの歯」と名付けられた。

県内では東名阪、伊勢、紀勢の各自動車道などから、津波による甚大な被害が想定される沿岸部方向への緊急車両等の通行を優先的に確保するため、24の「くしの歯ルート」を設定している。

県は能登半島地震を踏まえ、2024年度予算で13年度に策定した南海トラフ地震の被害想定を見直すための調査を行うとしている。ライフラインや交通網などの被害想定も見直されることから、個人や企業にとって防災対策を検討する上での貴重な情報源となる。能登半島地震を教訓に県内の防災対策がより一層進むことを期待したい。

(コンサルティング事業部 研究員 前田 研人)